第４回 神戸市スマートシティ推進会議 議事要旨

１．　日時　令和３年２月 22 日（月）　10 時 00 分～12 時 00 分

２．　場所　神戸市役所１号館　14 階大会議室

３．　会議次第・議事要旨

（１）開　会

（２）議事

①委員からの講演

講演１：武蔵大学社会学部　教授
庄司　昌彦氏

講演２：神戸大学大学院システム情報学研究科　准教授
藤井　信忠氏

②委員、構成員による質疑及び意見交換

●下山委員

- 行政がスマートシティを推進する際に、データの可視化・分析・公開範囲について検討する必要があると考えている。行政は、データの可視化・分析までを実施した上で、情報提供することが有効的だと考える。
- ニューヨーク市の Business Atlas という取り組みでは、自社でデータを可視化・分析できる企業と、そうではない企業の情報格差を是正するために、オープンデータの可視化・分析を可能とする基盤を市から企業に対して提供している。また、行政がデータの可視化・分析を想定した運用をすることは、機械判読性の高いデータの整備と提供につながる。

●庄司委員

- データを利活用したいと考える企業・団体のリテラシーは様々であり、データ収集・加工まで実施できる組織はまだまだ少ない。行政は、安易に可視化ツールを導入し、その情報を配信するだけではなく、総務省統計局や V-RESAS などでも実施しているように、利活用を見据えたデータの提供が必要とされていると考える。

○藤岡企画調整局担当部長

- 交通データ等を可視化したうえで提供することなどは、コロナ対応等で既に実施しているが、神戸市のスマートシティ推進において提供するポータルサイトでも、必要な情報を如何にわかりやすく事業者や市民の皆様に提供するかということを検討していく予定である。

●下山委員

- 神戸市は職員に対するデータリテラシー教育に力を入れていると認識している。その成果として、オープンデータポータルに可視化したデータを掲載してはどうかと考える。

○森企画調整局担当部長

- ご指摘の通り、神戸市は職員のデータリテラシー教育に力を入れている。
  そもそも、行政によるオープンデータの配信の意義は、市民や事業者と行政の情報の非対称性を改善するための取り組みの一つであると考えている。デジタル人材として育成していく職員が庁内の部局の縦割りの弊害を無くし、民間や市民とのコラボレーションを促していく事が出来ると期待しており、オープンデータポータルの情報拡充とともに、職員の意識改革にも取り組んでいく必要があると考えている。

●下山委員

- 神戸市外の人間から見た「神戸らしさ」の 1 つとして、他自治体より先行して職員の副業を認めた点や、積極的に外部人材を採用した点があると思っている。

●事務局

- 事務局としても、神戸市スマートシティ推進協議会（仮称）について、限られた組織や分野の人材で縦割りの組織を新たに作るわけではなく、組織や分野を超えた交流を促進できるような運用体制にしていくことを考えている。

●関委員

- 多様な人が集まる産官学連携イベントである078KOBE のような取り組みは素晴らしいと思っている。このような「祭り」の感覚は多様な人たちの行政への参画を促す上で、とても大事なことだと思っている。規模と同時に、「場の質」や「つながりの質」を高めていくことも必要だと思うが、078KOBEで繋がった人たちのまちへの関心を、定常的なまちづくりへの参加や、方向性のあるプロジェクトに活かしていくための課題などがあれば教えていただきたい。

●藤井委員

- 078KOBEの取り組みのみで、継続性を持たせることは難しいとも感じており、講演の中でも説明した神戸大学によるアーバンデザインセンターや COPLI などとも連携を進めながら推進している。
- また、最近の気づきとして、これまでは神戸に来ていただかないと様々なイベントに参加できなかった人々が、コロナ禍対策で導入が進んでいるオンライン化によって、神戸に足を運ばなくてもイベントに参加できるようになったことに価値を見出している人がいることが分かった。今後、神戸近郊に在住する人々だけではなく、どこに住んでいてもイベントに参加できるような取り組みを広げていきたいと考えている。

●藤井委員

- 事務局案にもあった通り、分科会を小さく始めて大きく育てる考え方はその通りだと思うが、まちづくりを俯瞰的に考えると、交通・決済・ヘルスケアなどが複雑に絡み合っていると認識している。分科会を俯瞰的にまとめる仕掛けがないと、それぞれの分科会の視野が狭くなるのではないかと危惧する。対応方針などあれば、お教えいただきたい。

●事務局

- 全体を俯瞰的にまとめる分科会として、『市民価値創造分科会』を検討している。この分科会は、どのようにすれば市民に価値を届けることが出来るかといった観点を持たせる予定である。また、資料の上では分科会が縦割りで表現されているが、実際には多様な分科会がそれぞれ協力し合い、市民の課題を解決していく事になると考えている。

●越塚委員

- 神戸市がスマートシティを目指していくうえでの方向性は、市民が参画すること、個人に応じた柔軟なサービスを提供すること、データ流通の仕組みを整備することなど、推進会議の中でコンセンサスが取れてきたと考えている。今後は、スマートシティを推進していくうえでの時間軸の認識を合わせていく必要があると考えており、これは 10 年先、20 年先、30 年後を見据えた検討をしていく必要がある。
- スマートシティを進めるうえでは、“今“の課題だけを解決するのではなく、”未来”に対して何を準備するべきかを考えながら投資しなければならない。そのためには、相互接続できないデータベースや死蔵したデータなどを生み出さないように、どのようなデータを蓄積していくべきかを常に考える必要がある。

○藤岡企画調整局担当部長

- 市民のニーズに基づいて、行政目線ではなく市民目線でスマートシティを推進していきたいと考えている。

●齋藤座長

- スマートシティを推進していくうえで、スマートシチズンを増やすことが大切であると認識したが、具体的にスマートシチズンとはどのような人であるかご教示いただきたい。

●藤井委員

- 「スマートな都市生活を享受する人々」であると考えている。都市生活でどのようにスマートシティサービスが提供されているかを理解し、活用している人々のことである。

●齋藤座長

- 20 年先、30 年先を見据えて、どのようにスマートシティを推進していくべきか、お考えがあればお教えいただきたい。

●越塚委員
- 10 年、20 年の後、スマートシティを推進するメンバーが変わったとしても、継続できる体制をつくりあげなければならない。すなわち、特定の人に依存しすぎることは避けなければならない。また、取り組みにも柔軟性を持たせることが必要であり、社会情勢を見据えたうえで柔軟に推進していく必要がある。
- また、長期のプロジェクトを推進するためには、地域の NPO やコミュニティなどを通じて市民を巻き込むことも大切である。
- データに関しては、連携するためのルールや順序などをあらかじめ定める必要がある。

●関委員
- サステナビリティに関する分科会を作っても良いのではないか。

●事務局
- 検討したいと思う。

●庄司委員
- 事務局案は網羅的に検討されているが、付加価値や面白さをもう少し追加したほうが良いのではないかと思う。行政が市民の意見を『取り入れる』というのではなく、市民が本当に必要としているものに取り組んでいかなければならないと思っている。
- そのためにも、『参加のデザイン』が重要になると考えている。参加の機会を多様な人々に常に提供し続けたり、自由な提案を受け入れる土壌を作っておいたり、計画に新たなテーマを取り込む余地を残しておくことなどが大切である。
- また、既に様々なテーマで動いている市民・企業・団体があるので、それらとつながる環境を準備しておくことなども重要である。
- 地域 SNS の研究を通じて感じたことは、最初の 100 人が重要であるということである。様々なバックグラウンドの人々が繋がることで、全体のダイナミズムを生み出すことが出来る。このような『参加のデザイン』を定義することが大切である。

●白坂委員
- スマートシティにおけるトップダウンとは、「トップがすべての方向性を決める」というわけではなく、市民や企業がスマートシティの取り組みに参加しやすいような仕組みを決めていくということである。
- 変化が激しい時代の中では、スマートシティで取り組むべきテーマは日々変わるため、柔軟に対応できる仕組みを作っていかなければならない。

●中村委員

- 会津若松市も時間をかけてスマートシティの推進に取り組んでいる。事務局案資料の3ページにもある通り、現状を徹底的に把握したうえで、目指すべき姿を実現するステップ論が必要であると考えている。
- あらかじめ道筋を決めておくルールやビジョンなどと、アジャイル的に日々見直しをするサービスなどを両輪で持ちつつ、スマートシティの取り組みを進める必要がある。
- 078KOBEなどで収集する個人情報はどのように管理しているか。

●藤井委員

- 参加人数や人流など、基本的に個人情報に抵触しない情報を収集・活用してきた。個人情報を収集して、何かしら市民にとって役立つように活用することは、今後考えていきたいテーマである。

●事務局

- 会津若松プラスと会津若松市のホームページの統合について、現状を共有いただきたい。

●中村委員

- 現在、会津若松プラスと会津若松市のホームページは連携しているが、職員の作業が 2 重作業にならないように、行政のホームページをやめることを検討している。スマートシティの市民ポータル上に地域の情報を収集して、パーソナライズ化した情報を提供することと、市民ポータルのインタラクティブ化を進めていく予定である。

●玉沖委員

- 神戸市スマートシティにおいても、高齢者に限らずデジタル弱者をどのように取りこぼさずに取り組みを進めるかは考える必要があると思う。この辺りの視点を持って、今後の議論を進めていければと考える。

●佐合委員

- 小さく始めて、市民の実感・共感を作ることが大切であると思う。神戸市スマートシティのビジョンを伝えていくためにも、わかりやすい言葉で共有をしていく必要があると考えている。

（3）開　会

（以上）